エル・システマ・フェスティバル2017

東京芸術劇場で四度目になるエル・システマの祭典

今年は、ベルリン・フィルのコントラバス奏者エディクソン・ルイスが大活躍。新生「東京ホワイトハンドコーラス」も登場。

世界席捲の音楽教育プログラム“エル・システマ”

ベネズエラの音楽教育プログラム“エル・システマ”出身の世界的指揮者グスターボ・ドゥダメル（米国屈指のロスアンジェルス・フィル音楽監督、世界二大オーケストラのベルリン・フィルとウィーン・フィルの世界ツアーも指揮する）が、シモン・ボリバル・ユース・オーケストラを率いて東京芸術劇場に登場したのは2008年のこと。今年は10年目になる。この10年で、日本でも“エル・システマ”という名称は認知され、そのプログラムが実践されるようになった。

エル・システマは、無料で楽器を習え、無料で楽器を借りられ、無料でオーケストラ活動に参加できる、ベネズエラ全土で展開される参加者70万人にもなる世界最大のオーケストラ教室プログラム。同時に同国の深刻な貧困問題への対処として、特に犯罪から子どもたちを守り、青少年に生きる価値を与える社会プログラムでもある。

東京芸術劇場では、2013年、2015年にもエル・システマのアーティストや音楽団体が登場する「エル・システマ・フェスティバル」を催し、今回は2年ぶりとなる。

エディクソン・ルイスの室内楽を堪能

今年のプログラムは、エル・システマ出身のスター・コントラバス奏者エディクソン・ルイス（ベルリン・フィル）による室内楽マスタークラスと室内楽コンサートから始まる。エディクソンは、ベルリン・フィルと共に15年以上も前から来日し、日本に多くの知己を持ち、日本の伝統文化にも理解を示す知日アーティストだ。地元ベルリンでも、積極的に室内楽活動をしているだけに、彼によるマスタークラスは音楽の中心地ベルリンの息吹を感じさせる興味深いものになるだろう。

エディクソン・ルイス

井上道義

©Mieko Urisaka

室内楽コンサートでは日本を代表するチェロの堤剛とピアノの伊藤恵等と共にボッテジーニやシューベルトを演奏する。ボッテジーニは19世紀に活躍したイタリアのコントラバス奏者で作曲家。“コントラバスのパガニーニ”と呼ばれたほどの大家だけに、エディクソンの超技巧を堪能できるまたとないチャンス。コントラバスのソロを聴く機会は多くないだけに、聞き逃すことはできない。

ララ・ソモス

©シモンボリバル音楽財団

東京ホワイトハンドコーラスのワークショップの様子

©Mariko Tagashira

日本とベネズエラ合同のエル・システマのガラ

最終日には、エディクソン、ベネズエラのエル・システマのアーティスト、それに2012年に福島県相馬から始まったエル・システマジャパンの指導者や子どもたちによるガラ・コンサートが行われる。第1部では、児童合唱で日本を代表する指導者の古橋富士雄の指揮による「相馬子どもコーラス」、ベネズエラ出身のソプラノ歌手コロンえりか、それに今年東京芸術劇場とエル・システマジャパンの共催で立ち上げられた「東京ホワイトハンドコーラス」が登場する。「ホワイトハンドコーラス」とは、エル・システマによる障害などの理由により発話が難しい子どもたちの参加を重視した合唱団で、白い手袋をして歌詞を表現する“手歌”を行うことからその名称が付けられた。続く、第2部では、そのベネズエラから「ホワイトハンドコーラス」の代表メンバーからなるヴォーカル・アンサンブル「ララ・ソモス」が登場する。そして、第3部では、ベネズエラに渡航してエル・システマのオーケストラを振った経験も持つ井上道義が、エル・システマジャパンの活動を支える人々からなる「フェローオーケストラ」を指揮する。演奏曲は、エディクソンのソロで、クーセヴィツキーのコントラバス協奏曲ト短調など。また、堤剛ら室内楽コンサート出演のメンバーも、今回フェローオーケストラの一員として出演する。

エル・システマは現在、世界70カ国・地域以上に広まっている。その理由は、子どもたちに“演奏する喜び”を与えているからだ。“合奏する喜び”、“合唱する喜び”。今回のエル・システマ・フェスティバルでも、きっとそのことを発見するだろう。

文：山田真一（音楽評論家／『エル・システマ』著者）

10月20日（金） 18:00開講 シンフォニースペース（5階）
エディクソン・ルイス 室内楽マスタークラス 聴講申込みはHPへ

10月21日（土） 14:00開演 コンサートホール
エディクソン・ルイスと仲間たち 室内楽コンサート
ヴァイオリン：辻彩奈　ヴィオラ：田原綾子　チェロ：堤剛
コントラバス：エディクソン・ルイス　ピアノ：伊藤恵

10月22日（日） 14:00開演 コンサートホール
エル・システマ ガラコンサート
指揮：井上道義　合唱指揮：古橋富士雄　ソプラノ：コロンえりか
コントラバス：エディクソン・ルイス　児童合唱：相馬子どもコーラス
東京ホワイトハンドコーラス（指導：井崎哲也、コロンえりか）
ララ・ソモス（ヴォーカル・アンサンブル）
管弦楽：フェローオーケストラ

詳細はP10へ

古橋富士雄

コロンえりか

東京芸術劇場コンサートオペラvol.5

ビゼー／歌劇『真珠とり』全3幕

演奏会形式 日本語字幕付 フランス語上演

音の大海原に包まれる境地を目指して

エキゾチックな音作りを得意とした作曲家ビゼーが、20代半ばで生み出した革新的なオペラ《真珠とり》。男同士の篤い友情と大自然の豊かな息吹が、客席の心を解きほぐす。

異国情緒を愛した天才作曲家ビゼー

大傑作《カルメン》の発表から三か月後、36歳で早逝したジョルジュ・ビゼー(1838-75)。彼は異国情緒を作り出すことにかけては、天才的な能力を有していた。中でも特筆すべきは、題材が自分にとって「未訪の地」であればあるほど、彼の想像力が刺激されたということ。《カルメン》は勿論スペインだが、そのほかにもエジプトやスコットランド、ロシアなど、行ったこともない土地柄をビゼーは次々と舞台化していった。オペラ史上稀にみるほどの尖った才能を有し、型にはまることを嫌った彼だけに、既存の情報に縛られず、自由な境地で音楽を作りたかったのだろう。そのビゼーが、まだ25歳という若さで、パリの劇場界に打って出た一作、それが、遥か南の島セイロン(現在のスリランカ)を舞台としたオペラ、3幕立ての《真珠とり Les pêcheurs de perles》である。

19世紀の人々を驚かせた問題作

漁夫の頭を務め、友情にも篤い男が、自分の恋心は封印した上で、部族の掟を破った尼僧と漁夫のカップルを逃がしてやるという《真珠とり》。21世紀の現在、本作の人気は高く、ビゼーの流麗なメロディが広く愛されている。まず、第1幕のテノールの優美なアリア〈耳に残るは君の歌声〉が、アルフレッド・ハウゼ楽団のアレンジで『真珠採りのタンゴ』として一世を風靡したことが大きいが、第1幕の友情の男声二重唱〈神殿の奥深く〉も、20世紀初頭の大テノール、カルーソーをはじめ大歌手たちの声でたびたび録音され、本作の復権に寄与した一曲である。

しかし、1863年に《真珠とり》がパリで世界初演を果たした時、客席はみな「困惑しきり」であった。その理由はひとえに、「音楽が滔々と流れ、合唱が支配的な曲調」が当時としては斬新過ぎたからである。

筋立てを深く理解したいフランス人は、オペラの舞台でも、語りに近い朗唱(レチタティーヴォ)とアリアを繋げるイタリア的な音作りか、アリアや重唱の合間にセリフを挿み込むオペラ・コミックのスタイルを好んでいた。朗唱なら言葉が聴きとりやすく、セリフならなおさら聴きとれたからである。しかし、全編が朗々と歌われ、合唱の出番も類を見ないほどに多い《真珠とり》は、全く新しい様式の一作であり、「歌詞を掴みにくい」とみなされた。それゆえ、旋律美の魅力は皆が認めたものの、公演は18回で終わり、ビゼーの生前に再び上演されることはなかった。

よみがえる《真珠とり》～海とビゼー

しかし、1886年に《真珠とり》がいきなり、奇跡の復活を遂げる。イタリアのミラノ・スカラ座が上演し、音楽の力が客席を大いに揺さぶったのである。その後、フランス本国でも、欧州各地でも《真珠とり》は続々と披露され、今では世界中で愛される一作になった。特に、字幕システムが発達した21世紀では、観客もドラマをより追いやすいので、ビゼーの耽美的なメロディとオーケストラの雄々しい響き、脈々と流れるコーラスの歌声を存分に楽しむことが出来るのだ。

《真珠とり》に接する人はみな、音楽が果てしなく広がる境地を体感するだろう。特に、冒頭の前奏曲の壮大な流れは、まさしく、大海原の穏やかさを音で描いたものにほかならない。実はビゼーは水泳が得意であり、イタリア留学の際に学友と海水浴を楽しんだ思い出を一生の心の宝としたほどだが、《真珠とり》のたっぷりとした響きは、その彼だからこそ作りえた、至高の境地なのである。「海は、どこまでも続くから海なのだ」というビゼーの思いがこのオペラには詰まっている。東京芸術劇場のステージでも、実力派のソリスト勢と若々しい歌声を響かせる合唱団、そして佐藤正浩指揮のオーケストラの面々の演奏が混然一体となり、「音の大海」で客席を包み込む瞬間を、心待ちにしている。

文:岸純信(オペラ研究家)

2018年2月24日(土) 14:00開演 コンサートホール 詳細はHPへ

指揮:佐藤正浩　管弦楽:ザ・オペラ・バンド(在京プロオーケストラメンバーによる)

レイラ:鷲尾麻衣　ナディール:ジョン・健・ヌッツォ

ズルガ:甲斐栄次郎　ヌーラバット:妻屋秀和

コーラス:国立音楽大学合唱団

料金:S席6,000円　A席5,000円　B席4,000円　C席3,000円　D席1,500円

佐藤正浩

鷲尾麻衣

ジョン・健・ヌッツォ

甲斐栄次郎

妻屋秀和

©Hikaru.☆

東京芸術劇場&ミューザ川崎シンフォニーホール共同企画

第8回 音楽大学オーケストラ・フェスティバル

音大オケに オーケストラの「未来」を聴こう!

皆さまはホールでオーケストラの演奏に浸るとき、何を期待しますか？その楽団が培ってきた伝統の音、個々のパートや奏者の技量、精緻な合奏技術から繰り出されるスリリングな快感、指揮者への共感や緊張感・・・オーケストラの楽しみ方はいろいろでしょう。

共演形式で開催される「音楽大学オーケストラ・フェスティバル」は、首都圏の9つの音大が、授業の中でオーケストラの音作りを基礎から学び、研鑽を積んできた成果を披露しあう演奏会です。共演校の存在が刺激となって若者たちの心と技が化学反応を起こし、プロ顔負けの演奏となることもしばしば。過去にも熱演を超えた素晴らしい演奏がたびたび繰り広げられてきました。このフェスティバルからプロのオーケストラ奏者に育っていった卒業生も多数いて、まさにオーケストラの「未来の音」に出逢える絶好の機会といえるのです。

プログラムにもご注目！オーケストラの機能性が試される難曲で技術と表現力を競うようなプログラムや、交響楽作品の名曲で真っ向勝負を挑むようなプログラムなど、どれも聴き応え充分。若手指揮者との力演や、巨匠・ベテラン指揮者との真摯な音楽づくりにも期待が高まります。また、共演校へのエールとして演奏される各校オリジナルのファンファーレも毎回楽しみな趣向。相手を敬い讃える「音楽の心」が、ホール全体に独特な温かさを醸し出してくれます。

音大生たちの創り出す響きに、オーケストラの「未来の音」を探してみるのも一興です。

文：吉田雅之
（デラルテ舎代表、フェリス女学院大学大学院非常勤講師、秋田・アトリオン音楽ホール芸術監督）

11月18日(土)15:00開演 コンサートホール 詳細はP12へ
東京藝術大学（指揮：ラースロー・ティハニ）&桐朋学園大学(指揮：中田延亮)

11月19日(日)15:00開演 コンサートホール
武蔵野音楽大学(指揮：時任康文)&東京音楽大学(指揮：川瀬賢太郎)

11月25日(土)15:00開演 ミューザ川崎シンフォニーホール 詳細はHPへ
上野学園大学(指揮：清水醍輝)&昭和音楽大学(指揮：海老原光)

12月2日(土)15:00開演 ミューザ川崎シンフォニーホール
東邦音楽大学(指揮：梅田俊明)&国立音楽大学(指揮：尾高忠明)&洗足学園音楽大学(指揮：秋山和慶)

東京芸術劇場パイプオルガン・コンサート Vol.22

聖夜に贈るクリスマス・オラトリオ

©Hikaru.☆

サン=サーンス《クリスマス・オラトリオ》を 東京芸術劇場クリスマスの定番に!

2015年のクリスマス・コンサートでご好評いただいたサン=サーンス《クリスマス・オラトリオ》は、降誕日のミサで必ず唱えられることば、福音書や詩篇などを、美しい音楽にのせて歌うクリスマス物語です。初演が行われたパリ、マドレーヌ教会の当時の実情に合わせたためか、編成は弦楽合奏、5人の独唱者を含む合唱、ハープと大オルガンという特殊なものです。また、曲全体がオルガンの柔らかな響きに包まれているため、オルガンそのものの音色に演奏の仕上がりが左右され、特に19世紀後半以降のフランスオルガン音楽に必須のストップ、オーボエが重要であること、など、演奏の条件が意外に厳しく、残念ながら日本ではあまり演奏されません。

そこで、オルガンという点では、フランスの古典期と19世紀ロマン派以降の演奏を得意とする東京芸術劇場のモダン・オルガンがまさにぴったりなレパートリーですので、年末恒例の《第九》や《メサイア》のように、東京芸術劇場クリスマス・パイプオルガンコンサートの定番として演奏していくことになりました。今年は、物語の進行と音楽との関係をよりわかりやすくするために、歌詞対訳をリアルタイムに表示するなど、さらに工夫を重ねていきたいと考えています。

今年の前半は、クリスマスの讃美歌による、J.S.バッハ《カノン風変奏曲「高き御空よりわれは来たり」BWV769a》を中心に、東京芸術劇場のパイプオルガンのもうひとつの様式、バロック・オルガンをお楽しみいただきます。18世紀の中部ドイツ、ルター派の音楽と、19世紀後半、フランス、カトリック教会のクリスマスの雰囲気を、どちらも当時に近い響きで、東京に居ながらにして楽しめるという、複数の様式のオルガンを持つ東京芸術劇場ならではの贅沢な演奏会です。

文：小林英之（東京芸術劇場オルガニスト）

12月19日(火)19:00開演 詳細はP14へ
コンサートホール
オルガン：小林英之／川越聡子
指揮：青木洋也
管弦楽：フィルハーモニーハンマーアンサンブル　ほか

小林英之 ©Nishikawa

川越聡子 ©谷藤貴志

青木洋也